

錦あすみの癒やしリラクゼーション

0 1 . 錦あすみとの関係

あすみ

「先輩？ お久しぶりですね」

あすみ

「え？ そんなに時間は経ってないって？ えへへ、そうですね。そうかも知れません」

あすみ

「でも私にとっては、先輩に会えない時間は、とても長く感じていました。ハッキリ言って、寂しかったです。一日千秋……というやつですね」

あすみ

「え、あ、そ、そうですね……どのくらい寂しかったか……えっと、肉まんが喉を通らない、くらいですかね……？」

あすみ

「あ、ち、ちがうんです！ せ、先輩のせいじゃなくて……！」

あすみ

「私がその……勝手に寂しがってしまったので……」

あすみ

「だ、大丈夫です！ 今日先輩に会えるということだったので、もう、沢山食べて来ました……！」

あすみ

「それに、先輩とこうしてお話できて、元気いっぱいです！ 今なら、ドームを占拠できてしまいそうな気がします！」

あすみ

「そうですね……あの文化祭から、随分経ったような、殆ど時間が経っていないような……そんな不思議な気持ちです」

「先輩にとってはどうですか？　きっと、いろんな感じ方があったんじゃないかな、なんて思っています！」

「今日は、その文化祭から時間が経ったいつか」

「あったかもしれない未来の、可能性のお話です」

「先輩と一緒にうちで過ごしたり、お泊りしたり、動画のための練習に付き合って貰ったり……そんな幸せな時間のお話です」

「これは私と先輩が出会って、一緒に文化祭を乗り越えたあとのお話です。なので、先に私達の大切なお話を知ってから、今日のお話を聞いてください」

「じゃないと、先輩、めっ！　です」

「あ、あと……」

「こーやって、先輩のお耳にささやくので、イヤホンや、ヘッドホンで聞いてくださいね」

「このASMRは、先輩専用です。配信では、絶対聞けません」

「それでは、せんぱい？」

「よろしくお願いします」

02. 私の身体で気持ちよくなってください

あすみ

「先輩、今日もお疲れさまです」

あすみ

「今日はなんだか、いつもよりも疲れてますね？」

あすみ

「あの……ですね……先輩がよかったら、なんですけど……マッサージ、させてくれませんか？」

あすみ

「い、いえ、無理なんてしてないです。先輩に、気持ちよくなってももらいたくて……」

あすみ

「ち、違うんです……！　そういうエッチな感じじゃ無くてですね……全く違うかと言われればそういうわけでもないんですけど……先輩に、ゆっくりしてもらいたくて」

あすみ

「あのあの、準備！　してきますね……？」

あすみ

「お、お待たせしました……先に、ベッドにタオルケットを敷きます……」

あすみ

「準備できました！　では先輩？　脱いでください」

あすみ

「あ、あのあの、そうじゃなくてですね、あの、オイルマッサージを、やってみようかと思っていて……た、たくさん勉強してきたので、是非……」

あすみ

「え、あ、ちち、ちがいます……！　上だけです……！　下はまだ……！」

あすみ

「あああ……！　ま、まだとかでは、なくもないんですが……脱ぐのは、上半身だけで大丈夫です……！　大丈夫、です！」

あすみ

「では、うつ伏せをお願いします……！」

あすみ

「それでは、始めますね……」

あすみ

「えへへ……なんだか、エッチな音ですね……」

あすみ

「え！？　怖くないですよ……？　きっと、気持ちがいいです。安心して、私に任せて下さい」

あすみ

「背中にオイルを……」

あすみ

「あ、くすぐったいですか？」

あすみ

「よかったです。最初ちょっと、ビクッてしていたので……」

あすみ

「先輩、やっぱり先輩の背中は大きいです。　しっかしりしていて、とてもカッコイイです」

あすみ

「でもちょっと、張ってますね。頑張ってほぐします……！」

あすみ

「せ、先輩……？　先輩の体をほぐすのに、私の力のなさを計算に入れてませんでした……！」

あすみ

「最悪です、これじゃオイル塗っただけです。体と床の間にテニスボールを挟んだ方がまだ気持ちいいですね。いっそのこと私もテニスボールになって先輩と床の間に挟まれて生きます」

あすみ

「私の方が気持ちいい、ですか？ そんな風に言われたら、嬉しくなっちゃいます。先輩、とっても優しいです」

あすみ

「んしょ……たくさん作業していると、腰とか、肩とか、つらくなっちゃいますよね……これで、先輩が少しでも楽になってくれたら嬉しいです」

あすみ

「先輩の硬いところを、ゆっくりゆっくりほぐしちゃいます」

あすみ

「この脇腹のところをですね、ぐいぐいと……」

あすみ

「あ、くすぐったかったですか……？」

あすみ

「普段はあまりない感触ですもんね。でもリンパの流れがどうかあったので、きっと体にいいはずです……!」

あすみ

「肩の辺りも、凝っていると首にまで来ちゃうので、念入りに押します……」

あすみ

「先輩？」

あすみ

「先輩、寝てます……？」

あすみ

「あ、ごめんなさい。起こしちゃいました？」

あすみ

「先輩が寝そうになって嬉しいような、寂しいような……」

あすみ

「もっともみもみしてあげたいんですけど……今日はひとまず、反対側を向いてもらってもいいですか……？」

あすみ

「そうです。仰向けです」

あすみ

「よいしょ……」

あすみ

「えへへ、乗っちゃいました。これで、先輩の顔も見れちゃいます」

あすみ

「……み、見れたら見れたで、恥ずかしくなっちゃいました……」

あすみ

「い、いつも見てますけど……でも、その……ちよっと普段とは違うケースなので、雰囲気が違うというか、なんというか……ぬるぬるして、エッチな感じもします……」

あすみ

「それでは……」

あすみ

「こっち向きだと、余計にドキドキしちゃいますね……」

あすみ 「先輩、気持ちよさそうです……先輩が気持ちよさそうにしていると、私も嬉しいです」

あすみ 「お腹だったり、胸のあたりも、縮こまったりしてしまうので、少し意識して伸ばしてみるのもいいかもですね」

あすみ 「お腹や胸が縮こまっていると、呼吸の質が悪くなったり、肩や首に……って、ご、ごめんなさい。今こんなことを話しても仕方ないですね。先輩は、ゆっくりして、何も考えずに、気持ちよくなってくれたら嬉しいです」

あすみ 「あ、背中側は終わったので、もう寝ちゃっても大丈夫です……！ ひっくり返って欲しいとかは、ないはずなので……体を楽にして、ストレスも、発散してくださいね」

あすみ 「えへへ、先輩の気持ちよさそうな顔、かわいい……」

あすみ 「え？ 手じゃなくて、体で、ですか……？」

あすみ 「それだと、ほぐしたりは、ちょっと難しくなっちゃいますけど……」

あすみ 「わ、わかりました。先輩がそう言うなら、やってみます……！ 少し、待ってくださいね……」

あすみ 「せ、先輩も脱ぐんですか？」

あすみ

「脱がして欲しい？ ふふ、いいですよ。先輩、たまに甘えん坊になっちゃいますね」

あすみ

「大丈夫ですよ。かわいいなあって思ってます。にやにやしちやいます」

あすみ

「では……改めて、お邪魔します……」

あすみ

「今度は、オイルを、体にも……」

あすみ

「先輩……ぎゅーってしちゃいます……」

あすみ

「んしょ……体で塗るって、難しいですね……」

あすみ

「先輩？ 重くないですか……？」

あすみ

「よかったです。軽い方が抱っこしてもらいやすそうな気がするので、軽いつて言われると、嬉しいです……！」

あすみ

「あっ……」

あすみ

「せ、先輩……あの……えっと……おちんちんが……」

あすみ

「あ、べ、別に、大丈夫なんですけど……というか、私のマッサージで反応してくれているのが、ちよっと、嬉しかったり……？」

あすみ

「ああああ、そ、そうじゃなくてですね、今は、マッサージで、その、エッチも、したくないわけはないんですけど、まだ、というか……あの……」

あすみ

「え？　いたずらっ子っぽく言い直してくれ、ですか……？　えっと、でもそれ言っちゃうと、止まれなくなっちゃうような……」

あすみ

「マッサージはまた今度……確かに、既にマッサージじゃないような気がします……」

あすみ

「先輩が、そういうなら……」

あすみ

「せんぱい？　マッサージしてるだけなのに、ここ、こんなになっちゃってますよ……？」

あすみ

「ふふ……せんぱい、エッチなんですね？」

あすみ

「マッサージでおちんちん大きくして、なに考えてるんですか？　気持ちよくなっちゃったんですか？」

あすみ

「いいんですよ？　先輩に気持ちよくなってもらいたくて、マッサージしてたんですから」

あすみ

「あっ……ビクって……また大きく……」

あすみ

「先輩、責められるの、好きなんですか？」

あすみ

「私に責められると新鮮、ですか？ そう……ですね……あまりそういう機会は無かったですね……何だか、どこかでそういう練習をしたような気がしますけど……」

あすみ

「こうして私が上になることも、そんなに無かったように思います」

あすみ

「で、では……もう少し、やってみます。あまり得意ではないので、先輩とのエッチで気持ちよくなっちゃったら、できなくなるかもですが……」

あすみ

「い、いきます……あ、いきなり、絶頂するという意味ではないです……!」

あすみ

「ご、ごめんなさい……」

あすみ

「せんぱい？ おちんちんこんなに大きくして、どうしたいんですか？」

あすみ

「ふふ、言ってくれないと、わかりませんよ？」

あすみ

「私の、どこに入りたいんですか？」

あすみ

「いいですよ、入れちゃって……もうとくに、びしょびしょになっちゃってます。オイルもいっぱいぬりぬりしたので、準備は、ばっちりですよ?」

あすみ 「先輩が入れたかったら、入れちゃって、大丈夫です。いつでも、いいですよ？」

あすみ 「じゃあ、私が、入れちゃいますね……」

あすみ 「オイルでぬるぬるになった先輩のおちんちんを、ぐしょぐしょの私のアソコにあてて……」

あすみ 「んっ……あああ……」

あすみ 「んっ……はあ……入っちゃいました……にゆるんって、いっきにきて、すごいです……」

あすみ 「せんぱいのおちんちん、きもちいいです……」

あすみ 「ふふ、せんぱいも、気持ちよさそうですね……おちんちん、びくびくしてます……」

あすみ 「あっ……んっ……ふあっ、ああっ……」

あすみ 「早速動いて、せんぱい、元気です……」

あすみ 「んっ……、大きいのが、奥までっ……」

あすみ 「ああっ……んっ……せんぱい……」

あすみ 「はあ……あっ……んうっ……せんぱい……激しい、です……ずっと、我慢、してたんですか……っ？」

あすみ 「なんだか、かわいいです……せんぱい、エッチな
んですね」

あすみ 「ふふ、知ってますよ。せんぱいが甘えん坊なの
も、エッチなもの。ずっと一緒にいるんですか
ら」

あすみ 「先輩のそういうところ見てると、かわいくて、す
ごく愛おしいです。ぎゅってしたくなっちゃいま
す」

あすみ 「でも、体では包んであげられないので、おまんこ
で、せんぱいのことしっかりと、抱きしめちゃい
ます……」

あすみ 「んんっ……ああ……また、なかで大きくなって……
…私のおまんこまで、膨らんじゃいますっ……」

あすみ 「もうっ……せんぱいのおちんちんは、暴れん坊な
んですから……」

あすみ 「私のおまんこ、せんぱいのサイズに広げられて、
戻らなくなっちゃうかもです……せんぱい？ 責
任、とってくれますか……？」

あすみ 「ふふふ、冗談です。もともとせんぱいのものなん
ですから、先輩の大きさに広がることは、何も問
題ないです」

あすみ 「むしろ……せんぱい専用になっていく感じが……
すごく、うれしいです」

あすみ 「あっ……ああっ……んっ……はあ……また、気持ち
いいところに……あてて……んんっ……声、が
まんできないっ……」

あすみ 「んっ……ふあっ、あっ……ああっ……せんぱい、
私のこと、くわしいです……んんっ……」

あすみ 「私の内側まで、先輩に知りつくされちゃってま
すっ……」

あすみ 「私も、先輩の弱いところ、知ってるんですよ？」

あすみ 「ふふ、いいですか？ 責めちゃっても」

あすみ 「じゃあ、遠慮なく、責めちゃいます」

あすみ 「（ちゅ……んっ……れろ……）」

あすみ 「んんっ……せんぱいっ、急に、ぎゅってしてきて
……お耳で、感じちゃったんですか……？」

あすみ 「くすぐったかっただけ？ 本当ですか？」

あすみ 「くすぐったいんだったら、もうお耳を舐めるのや
めちゃいますよ？」

あすみ 「冗談です。先輩がお耳舐められるのが好きなの
知ってるので、ちゃんと、なめなめます」

あすみ

「(れろ……ちゅ……ん……ちゅぶ……れる……)」

あすみ

「んっ……はあ……」

あすみ

「(ちゅぶ、んっ……れる……ちゆる、れろ……)」

あすみ

「はあ……せんぱい？　びくびくして、かわいいです……んっ……」

あすみ

「(れる……ちゆる……ちゅぶ……ちゆる……)」

あすみ

「はあ……んっ……」

あすみ

「(れろ……ちゅぶ……んっ……れる……)」

あすみ

「んう……せんぱい、さつきから、ぎゅってするから、強いです……そんなに、気持ちいいんですか？」

あすみ

「さつきから、す」くびくびくしてますもんね」

あすみ

「もっと、気持ちよくしてあげます」

あすみ

「(ちゆる、んちゅ……れろ……ちゅぶ……)」

あすみ

「ふあっ……んう……」

あすみ

「(ちゅ……れる……ちゅぶ……ちゆるる……)」

あすみ

「はあ……」

あすみ

「（ちゅぷ……ちゅ……れる……ちゅる、んちゅ……）」

あすみ

「じゃーあ、こっちも、なめなめしちゃいますね」

あすみ

「（ちゅぷ……ん……れる……）」

あすみ

「こっちでも、気持ちよさそうですね？　よかったです。いっぱい、なめなめしますね？」

あすみ

「（れる……ちゅ……ん……れる……）」

あすみ

「はあ……んっ……」

あすみ

「（ちゅぷ……れる……ちゅる……んちゅ）」

あすみ

「ふあっ……、おちんちん、すごく熱くなってます……イキそう、なんですか……？　お耳舐められて、イキそうになっちゃうなんて、せんぱいは、変態さんですね？」

あすみ

「（ちゅて……ん……れる……ちゅる……）」

あすみ

「んっ……はあ……んう……」

あすみ

「（ちゅぷ、んちゅ……れる……）」

あすみ

「はあ……んっ……せんぱいが、私の中でいっぱいあばれるから、私も、気持ちよくなってきちゃいました……」

あすみ

「（ちゆるる……れる……ちゅぶ、れろ……）」

あすみ

「はあ……ああ……」

あすみ

「（れろ……ちゅ……んちゅ……れる……）」

あすみ

「んんっ……はあ……んっ……」

あすみ

「（ちゅぶ……れる……ちゆるる、んちゅ）」

あすみ

「せんぱいっ……私も、もうっ、気持ちよく、なっちゃってっ……」

あすみ

「んんっ……せんぱいっ……せんぱいを責めてると、変な感じになって……自分が、なんだか悪い子に思えて、そう考えたら、変に、ぞくぞくしちゃってっ……」

あすみ

「せんぱいっ、気持ちいいですっ……オイルのせいで、いつもより密着感が、すごいですっ……ああっ……せんぱいの体、いっぱい感じてますっ……」

あすみ

「ああっ、はあっ、んっ、すごいですっ、せんぱいのおちんちんが、私の中、出たり入ったりして、たくさん、こすれてっ……んんんっ……」

あすみ

「あっ、やっ……んっ……せんぱいっ、ちから、つよいです……そんなに抱きしめられても、これ以上、くっつけないですっ……んんっ……はあっ……あっ……」

あすみ

「奥まで、せんぱいのが来てるっ……あっ、あっ、んっ……ふあっ、ああっ、せんぱいっ、深いですっ……」

あすみ

「あっ、あああっ、あっ、せ、せんぱいっ……？お尻つかんだらっ……あっ、だ、だめですっ……、お尻つかんだら、せんぱいのおちんちん、もっと、深く入っちゃいますっ……」

あすみ

「んんっ、はあっ、あっ、あっ、だめっ、だめですっ、一番奥に、あたってっ……赤ちゃんのころまで、ぐりぐりされてますっ……」

あすみ

「あっ、はあっ、ふあっ、あっ、んっ、はあ、はあ……んっ……せんぱいっ、わたし、もうっ、イキそう、です……」

あすみ

「ふあっ、あっ……はあ……あっ……んんっ……はあ……せんぱいっ……おちんちん、びくびく、してます……」

あすみ

「せんぱいも、イキそう、ですか……？」

あすみ

「はい……いっしょが、いいですっ……んっ……
ああ……はあ……んう……はあ……はあ……んっ
……せんぱいと、いっしょに、イキたいですっ……
……」

あすみ

「んんっ、せんぱいっ、せんぱいとのエッチ、気持ちよすぎて、わたしっ……はあっ、あっ……
んうっ、あっ、ああっ……」

あすみ

「せんぱいっ、ごめんなさいっ……わたし、もうっ、イキそうですっ……あっ、ふあっ、あっ、んんっ……せんぱいのおちんちん、気持ちよくて、イッちやいますっ……」

あすみ

「はあっ、あっ、ふあっ、あっ……んっ……あっ……
……ああっ……はあ……はあ……あっ、あっ、あっ、ああっ……」

あすみ

「んんっ、あっ、ああああああっ……！ あっ……
……はあ……んっ……ああ……」

あすみ

「はあ……はあ……んう……はあ……はあ……ああ……
……んっ……はあ……」

あすみ

「せんぱあい……イッちやいました……」

あすみ

「せんぱいの精液……いっぱい中に貰えて、嬉しいです……」

あすみ

「一番奥まで入って来て、お腹、いっぱいになっちゃいました……すごく、幸せです……」

あすみ

「で、でも、あの……途中から、いたずらっ子っぽく、できなくなっちゃいました……」ごめんなさい……」

あすみ

「え？ さっき変な事を言っていた？ あ、責めるとか、ぞくぞく、とか、ですね？」

あすみ

「え、えっと、先輩を責めるのは、あまり好きではないんですけど、責めている自分が、何だか、好ましくなくて、でも、先輩の言う通りにしていることは、何だか嬉しくて……」

あすみ

「あ、あと……責める自分を強いられているのが、なんだか、ぞくぞくしてしまったというか……」

あすみ

「あつ、あのっ、ごめんなさい……私、とんでもない変態ですね……！先輩を責めなくてはいけないという苦痛に興奮してしまうなんて、最悪です。これからはドM系Vtuberとして生きていきます」

あすみ

「え、気にしないでいい？ 本当ですか……？」

あすみ

「よかったです……先輩の心が広くて、また救われてしまいました」

あすみ

「でも、今日は先輩にリラックスしてもらうつもりだったのに、私の方ばかりしてもらっちゃって、なんだか申し訳ないです……」

あすみ

「今もこうして、体をくっつけていられるのが、幸せです……」

あすみ

「ありがとうございます。先輩にも気持ちよくなつてもらえたなら、準備した甲斐がありました」

あすみ

「はい。言ってくれたら、いつでも、マッサージしますよ」

あすみ

「せんぱい？ また、私の体で、気持ちよくなってくださいね？」

03. 一緒にお風呂に入りませんか？

あすみ 「せんぱい？ このままだと寝られないので、一緒にお風呂、入りませんか？」

あすみ 「はい。一緒に入るの、嬉しいです。付き合い始める前に、一緒に入って、いろいろあったせいかもしれません……」

あすみ 「あ、あの時は、なんというか……できないことも多かったですけど、今なら、堂々として、いろんなこと、できちゃいますね。あ、え、えっと、いろんなこと、しようとしているわけではなくてですね、したい、のは、間違いないんですけど……あの、その……」

あすみ 「そ、それでは、いきましようか……！」

あすみ 「せんぱい、そろそろ、お背中、お流しますね」

あすみ 「え！？ わ、私はもう、さっき洗ったじゃないですか。は、はい……では次の機会には、私も、先輩に背中を流してもらうことにします……」

あすみ 「あ、いえ、嫌というわけじゃなくて、単純に恥ずかしすぎるので……」

あすみ 「えっちとはまた違う恥ずかしさがあるというか……でも、大丈夫です……！ 今回は、ともかく、次回は、洗ってもらう覚悟を決めました……！」

あすみ 「今回は、先輩が、洗われてください！」

あすみ

「では、頭から洗いますね」

あすみ

「お湯を、掛けます……」

あすみ

「熱くないですか？ 熱かったら、すぐ言ってくださいね」

あすみ

「あ、えっと……熱いのが好きな場合も、言ってくださいね……？」

あすみ

「先輩……髪の毛が濡れて、しなっとなってるの、カッコイイです……素敵です。ずっと眺めていたんです……」

あすみ

「で、でも、我慢して、先輩の髪の毛を、洗います……！」

あすみ

「先に、手で泡立てちゃいますね」

あすみ

「えへへ、泡立てるのって、なんだかいいですよ
ね、あわあわです」

あすみ

「せんぱいの頭も、泡だらけにしちゃいます！」

あすみ

「かゆいところはないですか？」

あすみ

「気になったら、言ってくださいね」

あすみ

「先輩、いつも綺麗にしているから、かゆくないのかもですね」

「カットしてもらったときのシャンプーで、かゆいところあるって言ったことあります？」

「私は、ないんです。いつも、言う人いるのかな、なんて思ってた……」

「流しますね。目を開けたらだめですよ？」

「水の音って、なんだかいいですよ。心が落ち着くと言うか……。やっぱり、生物はみんな海で生まれたからなんですかね……？」

「あ、ご、ごめんなさい……。よくわからない話をしてしまって……。泡、しっかり流しますね……」

「これで、シャンプーはお終いです！ さっぱりしましたね」

「次は……。次こそ、お背中、お流します……！」

「先輩の背中、やっぱり、大きくて、かっこいいです。こうして明るい場所でじっくり見ると、意識しちゃいます……」

「す、すみません、ちゃんと、お背中をお流します……！」

「ボディタオルで、ごしごししますね。痛かったら、すぐに言ってください」

あすみ

「まず、泡立てて……」

あすみ

「ごしごし」

あすみ

「いたく、ないですか？ 大丈夫ですか？」

あすみ

「ごしごし」

あすみ

「こうして先輩とお風呂に入ってるの、幸せです。ボランティアの時のお風呂じゃ、できなかったの
で」

あすみ

「あの時、先輩は……あ、だ、だめですね。そういう、真意を聞こうとするのは、よくないです……
……想像しておくことにします……！」

あすみ

「そろそろ洗うところもなくなって来ました……」

あすみ

「ま、前、ですか……前は、ちょっと、恥ずかしい、というか……あの……ここ、とっても、明るいので……前はやっぱり、恥ずかしいのかな、なんて……」

あすみ

「え？ 後ろから前を洗う？ あ、なるほど、それなら……」

あすみ

「あ、で、でも、ですね、体が密着してしまうので、その……！」

あすみ 「寧ろ体で洗って欲しい……？ そ、そうなんです
か……？」

あすみ 「わ、わかりました……先輩がいうなら、やってみ
ます……！」

あすみ 「まずは、私の体に泡を付けて……」

あすみ 「では、失礼します……」

あすみ 「くっついちゃいました……せんぱい？ 大丈夫で
すか……？」

あすみ 「私は大丈夫です。ちゃんと、先輩に覆いかぶさる
ように、抱きついてるので、心配しないでくださ
い」

あすみ 「「平ら過ぎるだろ、背中押し付けてんじゃねー
よ」とか、思わないでくださいね……！」

あすみ 「それでは、動きますね……」

あすみ 「どう、ですか……？」

あすみ 「あ、よかったです。気持ちいいって言ってもらえ
て。先輩が、私の体でも喜んでくれる人で嬉しい
です」

あすみ 「あ、でも、先に、前も洗っちゃいますね」

あすみ 「後ろから、失礼します……」

あすみ

「なんだか、不思議な感じです。二人羽織って、こんな感じなんですかね……」

あすみ

「くすぐったいですか？ あう、ご、ごめんなさい、満足に体も洗ってあげられないなんて彼女失格ですね。私はボディタオル以下でした」

あすみ

「もつと上手くできるように、頑張ります。洗車機くらいのクオリティを目指します……！」

あすみ

「あ……」

あすみ

「せ、せんぱい？ あ……お、大きく、なっちゃってますね……？」

あすみ

「い、いえ、私は、大丈夫です。何度も、見てまし、先輩のなら、見たいくらいですし……」

あすみ

「えっと、あの、手でしても、いいですか……？」

あすみ

「そ、そうですね……体洗った後にやったら、また洗い直しになるので、今の方が……」

あすみ

「せんぱいのおちんちんも、手で……し……しますね……？」

あすみ

「あわあわな手で、おちんちんを包んで、……し、です」

あすみ

「全部、手で綺麗にしちやいますね……」

あすみ

「せんぱい、私の体に反応してくれて、嬉しいです……後ろから抱きついてるだけなのに、こんなに硬くなって、私に価値があるんだって言われてるみたいです」

あすみ

「えへへ、せんぱい。気持ちよさそうな顔、鏡に映ってますよ？」

あすみ

「あ、今更、そんなことはない、って感じの顔しても、だめです。もうばれちゃいました」

あすみ

「もっと、気持ちよくしてあげますね……」

あすみ

「せんぱいのおちんちん、びくびくしてきました……出したくなったら、いつでも、大丈夫ですから……」

あすみ

「んっ……わたしも、胸が少し、こすれて……」

あすみ

「せんぱい……耳、舐めちゃいます……」

あすみ

「（ちゅ……れる……）」

あすみ

「はあ……んっ……」

あすみ

「（ちゅぷ……ん……れる……ちゅ……）」

あすみ

「ふあ……ああ……せんぱい、こし、少し動いてます……おちんちんも、大きくなって……」

あすみ

「（ちゅる、れる……んちゅ……ちゅる）」

あすみ 「おちんちん、びくびく、震えて……もう、でそ
う、ですか……？」

あすみ 「（れる……んちゅ……れる……ちゅぶぶ……ちゅ
る……ん……れりゅ……）」

あすみ 「んっ……はあ……出して、いいですよ……いつで
も、気持ちよくなってくださいっ……」

あすみ 「（ちゅ……んっ……れる……ちゅるる、れる……
ちゅぶ、ちゅるる……じゅる）」

あすみ 「あっ……んうっ……」

あすみ 「せんぱい、私の手の中で、びくっ、びくって、精
液出して、可愛かったです……」

あすみ 「まだ、でてますね……最後まで、出さないと……
……」

あすみ 「せんぱい？ 大丈夫ですか？ 変に疲れたりして
ないですか？」

あすみ 「そ、それなら、えっと、体、洗うの再開ですね……
……おちんちんも、洗わないとですね……」

あすみ 「せんぱい……失礼します……」

あすみ 「先輩の前に、来ちゃいました」

あすみ

「せんぱいのおちんちん、お口で、綺麗にしますね……？ いい、ですか……？」

あすみ

「よかったです……先に、泡だけ、ちよっと流しちゃいますね……」

あすみ

「それでは、失礼します……」

あすみ

「ちゅ……んっ……れる……ちゅぶ……」

あすみ

「少し小さくなったおちんちんも、可愛いですね……」

あすみ

「はむっ……ちゅぶ……れる……んちゅ……れる……」

あすみ

「あ……また、大きくなって……んっ……れる、ちゅ、んんっ……ちゅぶ、れる……」

あすみ

「せんぱい、すぐ元気になるんですね、素敵です……んちゅ……れる……ちゅ……ちゅぶ……れる……」

あすみ

「あむっ……んっ……ちゅる、んうっ……れる……ちゅぶ、ちゅるる……」

あすみ

「はあ……ちよっと、泡の味が……んっ……はむっ、んっ……ちゅるる、れる、ちゅぶ、ん……んちゅ、れる……ちゅぶ」

あすみ

「せんぱい？ また、かわいい顔してます。気持ちよさそうです……もっと、気持ちよく、してあげますね？」

あすみ

「れろ……んっ……あむっ……ちゆる、んちゅ……じゅぶ、れる……ちゅぶ、ちゆる……じゅぶ、れろ……また、びくびくしてきました……」

あすみ

「はむっ、んちゅ……れる……じゅぶ、じゆるる、れろ……じゅぶぶ……ちゆる……れる……ちゅぶ、んんっ……じゅぶ、じゆるるる……」

あすみ

「はあ……せんぱい……いつでも、いいですよ？ わたし、ちゃんと、受け止めますっ……あむっ……んっ……じゅぶ、じゆるる、れろ……」

あすみ

「じゅぶ、れる……じゅぶぶ、じゆる、じゆるるる……はあ……んっ……れりゅ……じゆるる、ちゅぶ、れろ……じゅぶぶ、じゆるる……ふあ……んう……れる……じゆるるる……」

あすみ

「せんぱい？ きてください、わたしの口に、せんぱいの、白くてどろどろした精液、いっぱい、出してくださいっ……」

あすみ

「はむっ、んんっ、じゅぶっ、れる……じゆるる、れろお……じゆるる、じゅぶ、れりゅ……んちゅ……じゅぶぶ、れりゅ……はあ……あむっ……じゅぶぶ……」

あすみ

「んっ……じゅりゅ、れろ……じゅぶぶ、じゅる、
じゅるるる……れる……んちゅ……ちゅる、
じゅぶ、れりゅ……じゅぶ、じゅるる……ふあ……
…あっ……せんぱい、おちんちん、ふくらんで、
びくびくって、ふくらんで、でそうに、なってます……」

あすみ

「せんぱい、きて、くださいっ……あむっ、ん
んっ、じゅるっ、じゅぶぶ、じゅりゅ、れろ……
んんっ、じゅぶぶ、じゅる、じゅるる、じゅるる
るるるるる……」

あすみ

「んんっ、んっ……んんんっ……」

あすみ

「んっ……んう……んん」

あすみ

「んんっ……んっ……こくん……」

あすみ

「何だかもの寂しくなっちゃったので、先輩にくっ
ついて、飲んじゃいました」

あすみ

「えへへ、美味しかったですよ？」

あすみ

「先輩のおちんちんも、しっかり綺麗にできまし
た」

あすみ

「あとは、ゆっくりお湯に浸かって、休みたいです
ね」

あすみ

「せんぱい？ 疲れたからって、長湯して、のぼせたらだめですよ？」

あすみ

「私は、もうせんぱいに、のぼせているので、これ以上はのぼせません」

0 4 . 先輩の耳なら何度でもお掃除します！

あすみ

「え？ 耳かきですか？」

あすみ

「はい、大丈夫です！ 先輩のお耳だったら、何回でもお掃除します……！」

あすみ

「あ、でも……」

あすみ

「いえ、なんだか、いつか耳かきをしようとして、耳かきにならなかったことが、あったような、なかったような……？」

あすみ

「あったかもしれない無念を晴らすため、今回は、しっかりと、お掃除させて頂きます……！」

あすみ

「ちよっと、準備してきますね」

あすみ

「先輩、お待たせしました。膝枕で、お願いしてもいいですか？」

あすみ

「はい、では、こちらに、お願いします。えへへ、先輩を膝枕できるの、嬉しいです」

あすみ

「左耳から、ですね。分かりました」

あすみ

「先輩が外を向いてしまうのは少し寂しいですけど、あとでゆっくりこっちを向いて貰えると思って、頑張ります……！」

あすみ

「耳かきをするときは、いつもお風呂上がりですね。太もも、しっとりしている方が先輩は好きなんですか？」

あすみ

「わ、分かりました……！ 常にしっとりできるように頑張ります……！ うるおいに命をかけます……！」

あすみ

「では、最初は、お耳を拭きますね」

あすみ

「先輩、大丈夫ですか？ くすぐったくないですか？」

あすみ

「大丈夫なら、続けますね」

あすみ

「先輩のお耳は綺麗ですね。耳かき、しなくても大丈夫かも……？」

あすみ

「気持ちいいから、ですか……。私は、先輩相手にこういうことをするのが好きなので、いいんですけど、あまりしすぎてもお耳に悪いので、たまに、ですよ？」

あすみ

「先輩のお耳が悪くなっちゃったら、悲しいです」

あすみ

「もうちょっと、拭きますね」

あすみ

「はい、では、耳かきを、始めます。危ないので、動いたらダメですよ？」

あすみ

「先輩のお耳、外側から、かりかりしちゃいます」

あすみ

「痛くないですか？ 痛い時は、すぐに言わないとだめですよ？ こればかりは、痛い方が気持ちいいっていうのは、だめですからね？」

あすみ

「では、今くらいの感じで、かりかりしますね」

あすみ

「ど、どうでしょうか……気持ち悪くないですか……？」

あすみ

「えへへ、先輩が気持ちいいって言ってくれと、かりかりするのも、楽しくなっちゃいます」

あすみ

「あ、でも、やりすぎないように、気を付けます……！」

あすみ

「外側は、終わりです。次は、内側をしますね」

あすみ

「外側でも危ないことには変わりないですけど、内側は、動くと本当に危ないので、気を付けて下さいね」

あすみ

「先輩のお耳の内側、かりかりしちゃいます」

あすみ

「せんぱい、なんだか、気持ちよさそうです。気持ちよさそうな先輩を見るために、もっと頑張つて、上手くなないと……」

「え？ 耳かきが上手いってどういうことなのか？
ですか？」

「そ、そうですね……耳垢を取るのが上手いとか、
気持ちよくさせてあげられる、とかなのかなっ
て、思います」

「あとは……早めに病気に気づいてあげられる、と
か……？」

「あ、確かに、そこまでいっちゃうと、お医者さん
ですね……」

「私は、歌で、先輩のお耳を癒せるように、がんば
ります」

「では、そろそろ反対を……」

「え？ 息を吹きかける、ですか？」

「えっと、あの、くすぐったく、ないですかね……
……？」

「大丈夫ですか……？ では、失礼します……」

「ふ……」

「もう一回……」

「ふ……」

「えへへ、せんぱいの反応、なんだか可愛いです。もっと、したくなっちゃいます」

「ふー……」

「あ、でも、いつまでもこうしているわけにはいかないですね……」

「そろそろ、反対側で、お願いします……！」

「えへへ、やっと、先輩がこっちを向いてくれました」

「せ、せんぱい……あっ……んっ……触るのはいいんですけど、いまはちょっと、耳かき、できなくなっちゃいますっ……」

「あとで、いっぱい触っていいので……いまは、耳かき、させてください」

「せんぱい、いたずらっ子です……でも、そんなところも素敵です」

「ふふ、ありがとうございます、耳かきの、続きをしますね」

「せんぱいのお耳を、耳かきで、かりかりしちゃいます」

「こっちも綺麗ですね。でも、たくさん、かりかり
しちゃいます……！」

「あ、せんぱいっ……だめですっ……耳かきしてる
のに、いたずらしちゃ……ささっちゃいますっ……
…」

「もう……せんぱい？ 今は外側でしたけど、危な
いです。めっ！ です」

「先輩の、お体のことなので、今回ばかりは、譲れ
ません。いたずらをやめて、耳かきをするか、耳
かきをやめて、いたずらするか、です」

「ふふ、わかりました。耳かきを続けますね。いた
ずらは、いつでもできますもんね」

「引き続き、かりかりします……！」

「はい、これで、外側はお終いです！ せんぱい、
せんぱいが、落ち着いてくれたので、安全にでき
ました。ありがとうございます」

「せんぱい、なでなでしちゃいます」

「次は、内側をお掃除しますね。こんどは、いたず
らすると、本当に刺さっちゃうので、気を付けて
下さいね」

あすみ

「せんぱい？ なでなでも気持ちいいんですか？
これも、あとでいっぱいさせてくださいね」

あすみ

「それでは、続きを、やっちゃいます」

あすみ

「せんぱいの、お耳の奥に、耳かき、入れちゃいます。かりかり、しちゃいます」

あすみ

「せんぱい？ やっぱり、内側の方が気持ちがいい
んですか？ なんだか、気持ちよさそうに見えます」

あすみ

「あつ、せんぱいっ……足にすりすりするのも、だ
めです。んっ……あつ……せんぱいっ、息、吹き
かけたらだめですっ……せんぱい、甘えん坊で
すっ……」

あすみ

「せんぱい？ それも、危ないです。私が、変な気
持ちになっちゃうので、今は、だめです。普段な
ら、むしろ、して欲しいくらいなんですけど…
…」

あすみ

「私も、せんぱいにすりすりしてもらいたいのを我慢
して耳かきをするので……せんぱいも、もう
ちよっと我慢してください……！」

あすみ

「ふふ、先輩は優しいです。お願いを聞いてもらえ
て、嬉しいです。耳かきも気持ちいいと思うの
で、リラックスして、かりかりされてください
ね」

あすみ

「また、先輩のお耳の中を、この耳かきで、かりかり、しちやいますね」

あすみ

「ふーっ……」

あすみ

「えへへ、いたずらしちゃいました」

あすみ

「ふー……」

あすみ

「先輩が、いっぱいいたずらするので、私もちよつと、挑戦です」

あすみ

「ふー……」

あすみ

「くすぐったそうにしている先輩も、素敵です。それでは、本当に、続きをしますね。かりかり、です」

あすみ

「せんぱい？ 終わりましたよ。触っても……つて、せんぱい、おねむなんですネ」

あすみ

「ふふ、せんぱいの眠そうな顔も、かわいいです。なでなでしちやいます」

あすみ

「せんぱい、かわいいなあ……普段はかっこいいけど、こうしてると、小さなこどもみたいで……見ると、幸せな気分になっちゃいます」

あすみ

「このまま、ここで寝るのも魅力的ですけど、もう少ししたら、ちゃんとした場所で、やすみましょうね」

あすみ

「せんぱい、お疲れさまです」

05. 添い寝して朝まで一緒です

あすみ 「せんぱい？ もう、ベッドに入っちゃってるんですね。もう、寝ちゃいました？」

あすみ 「あ、起きて……」「ごめんなさい、ひよっとして、起こしちゃったり……」

あすみ 「よ、よかったです……せんぱい、あの……ですね……そろそろ、寝ようかと思うんですが、そちらに、お邪魔しても、大丈夫ですか……？」

あすみ 「ありがとうございます。えへへ、お邪魔します」

あすみ 「お邪魔しちゃいました。温かいです」

あすみ 「せんぱい、ぎゅーです。ハグハグです」

あすみ 「せんぱい、いい匂いです。せんぱいの匂いかいでしたら、心地よくて、眠くなっちゃいますね……」

あすみ 「せんぱいと一緒だと、朝までぐっすりです」

あすみ 「せんぱい？ いつも、くたくたになるまで、お疲れさまです」

あすみ 「せんぱい、とっても頑張ってた、カッコイイです」

あすみ 「あ、無理して欲しいと言っているわけじゃなくてですね……その、どうしてもやらなくてはならないことって、あると思うんです」

あすみ

「自分のやりたいことのためだとか、生きていくためだとか、理由っていろいろあるんだと思います。そうやって頑張っている先輩は、やっぱり、カッコイイです」

あすみ

「でも……もし、本当に辛いと思ったら、休んでみることも必要だと思うんです。それは逃げているのとは違うと思います。風邪を引いたら、休むじゃないですか。心が疲れても、同じなんです。休まないと、壊れてしまいます」

あすみ

「せんぱい？ 間違っではダメですよ？ 休んでも、いいんです。道は一つではありません。無理して、ボロボロになって……。本当はいろんな選択肢があるのに、それを考えられなくなってしまいうことが一番だめなんです」

あすみ

「私は、先輩に教えてもらいました。何かあっても、またやり直せばいいんだって。せんぱい？ 休むことは、逃げるわけでも、終わってしまうわけでもないと思います。また歩き始めるための、自分を見つめ直すための、充電時間なんです。ちよっとくらいハミダシたって、大丈夫なんです。何回だって、やり直せるんです」

あすみ

「その、それですね……。疲れている時とか、充電したい時はですね……。私のところに来てくれたら、嬉しいな、なんて、思ったり……。せ、せんぱいの、休める場所に、なりたくなって……」

「はい、いくらでも、ぎゅーってします。それで、先輩が元氣になってくれたら嬉しいです」

「えへへ、せんぱいとくつつくと、私も元氣になっちゃいます」

「んっ……せんぱい……相変わらず、足を絡めるのが好きですね……あ、大丈夫です。私も、先輩と足を絡めるの、好きなので。えへへ、温かいですよね」

「せんぱい、そうやってくつついてきてくれるの、かわいいです。なでなでしちゃいます」

「せんぱい、よしよしです」

「せんぱいのこと、もっとぎゅってしちゃいます」

「いまは、いっぱいすりすりしても、大丈夫ですよ？」

「せんぱいにすりすりされるの、気持ちいいです。幸せな時間です。私も、すりすりしちゃいます……」

「えへへ、私も、充電できちゃいます。先輩とこうしていられると、元氣がでます」

「でもやっぱり、心地よくて、すぐに、眠くなっちゃいますね……」

あすみ

「せんぱいも、眠そうです……」

あすみ

「ふふ、そうですね。そろそろ、明日に備えて、寝ちやいましょう。せんぱいと一緒なので、ぐっすり眠れること、間違いないです。安心しきっちゃうからかもですね……」

あすみ

「幸せ過ぎて、寝るのが勿体ないって思っちゃうくらいです。でも、寝ないとですね……」

あすみ

「せんぱい？ おやすみなさい。また明日です」

0 6 . 寢息

あすみ	あすみ	あすみ	あすみ
-----	-----	-----	-----

「んっ……せんぱい……」	「んう……」	「んんっ……」	「肉まん……」
--------------	--------	---------	---------

07. おはようございます

あすみ 「先輩、朝ですよ？」「ご飯もできたので、そろそろ……」

あすみ 「まだ寝てる……？ 寝顔、見ちゃおうかな……
いっしょに寝る時は、暗い時が多いから、寝顔は
あまり……」

あすみ 「朝起きて直ぐは、見てるといつまでたっても起き
れなくなっちゃうし……今なら、先輩が起きるま
でなら、見ても……」

あすみ 「せんぱい？ 朝ですよ、起きてください」

あすみ 「起きない……やっぱり、お疲れなのかな」

あすみ 「寝かせてあげたい気もするけど……」

あすみ 「せんぱい、起きて下さい。ごはん、冷めちゃいま
すよ」

あすみ 「せんぱーい」

あすみ 「……起きない」

あすみ 「少し、添い寝しちやおうかな……」

あすみ 「失礼します……」

あすみ 「えへへ、潜り込んだじゃった」

あすみ 「せんぱい……なでなでしちゃいます……」

あすみ

「か、勝手にキスしたりしたら、怒られちゃうかな……でも、ぐっすり寝てるし……し、しちゃんおう、かな……？」

あすみ

「だ、誰も見てないし……いいよね……？」

あすみ

「せんぱい？ 大好きです……」

あすみ

「ちゅ……んっ……」

あすみ

「えへへ、しちゃった……」

あすみ

「たまには、こうやってくつついたまま、一日中ごろごろしたりとか、してみたいですね、先輩」

あすみ

「そのために、今頑張って、詩桜先輩に教わりながら不労所得の仕組みを作って……目指せ、週休七日……！」

あすみ

「そうしたら、毎日先輩とイチヤイチヤできますね」

あすみ

「あ、音楽を作ったり、Vtuberとして活動するのは、趣味の一環なので、仕事って感じではないですよ？ そういう状況になったら、たぶん、企業からは、抜けていると思います」

あすみ

「……って、先輩寝てるのに、一人で語っちゃった……」

あすみ

「ふふ、先輩の寝顔、かわいい……あ、写真、撮っちゃおうかな……えっと、スマホ、どこだったかな……」

あすみ

「あった……！　これで先輩の寝顔を……」

あすみ

「あっ……」

あすみ

「せ、せんぱい……？　起きてたんですか……？　今起きた……？　お、おはようございます……私は、別に、その、先輩の寝顔をですね、写真に撮ったりですね、しようとしていたわけではなくてですね……？」

あすみ

「えっと、あの、あの……そ、そう……！　アプリで、先輩の戦闘力を計ろうとして……！」

あすみ

「ご、ごめんなさい……嘘です。本当は写真を撮って、待ち受けにしたり、眺めてにやにやしようと思っていました……！」

あすみ

「今でもいっぱい写真ありますけど、やっぱり、新しいのも、欲しいです……」

あすみ

「あ、そ、それですね、先輩、ご飯がもうできているので……いっしょに食べましょう」

あすみ

「はい。できたてです！　ちよっと、いろいろしたので予定よりは、時間が経ってしまいましたけど……」

あすみ

「え、えっと、変なことは、してないです……！
せんぱいを、襲ったりしてないので、大丈夫です
……！」

あすみ

「な、なので、安心して、ゆっくりご飯を食べま
しょう……！」

あすみ

「うう……なんだか、いろいろもうしわけないです
……」

あすみ

「でも、こうして、朝も」一緒にできるようにした
のは、嬉しいです」

あすみ

「卒業して、学園で会えなくなっただけからは、次はい
つ会えるのかなって、寂しく思っちゃう日もあり
ましたけど……いまは「今日は会えないのかあ……
……」なんて、会えない日の方が少なくなって、
ちよっと贅沢な悩みに変わっちゃって、ワガママ
になっちゃったんだなって、思います」

あすみ

「こんな幸せな日が、もっと続いたらいいなって思
います」

あすみ

「その第一歩のために、ちゃんと起きて、顔を洗っ
て、一緒にご飯を食べましょう！」

あすみ

「せんぱい？ もっともっと、毎日会うのが、当た
り前になったらいいですね」

08. 番外編 1 雪景シキの動画収録風景「カーナビ」

あすみ

「こにやにやちわー！ 今日、車についてるモニターからお邪魔します！ みんなー、元気にしたあ？ もし疲れてても、これから私がすっごくいいところまで案内するから、箱舟に乗った気持ちで、運転してね！」

あすみ

「え？ 箱舟は大きさ？ でもね、最近の自動運転は、時速140キロで走ってもぶつからないらしい！すごいね！ 大船どころじゃないよね！ 屋根も飛ぶしね！」

あすみ

「140キロって、88マイルくらいだよ。時速88マイルって、タイムトラベルしちゃいそう！」

あすみ

「え？ 古い？ 古いかー。私も最近見たしね！ でもあれは必須科目みたいなものだからね、みんなも、見ておいてね？」

あすみ

「というけど、今回は、わたくし雪景シキが、カーナビゲーションとして、みんなの運転をお手伝いしちゃいます！」

あすみ

「……………あ、あの、先輩……………本当にこれ、やるんですか……………？ 先輩の目の前で雪景シキ風に喋るの、とてもつらいのですが……………あの……………」

あすみ

「た、確かに練習をしたいと言ったのは私ですが……で、でもですね、いざやってみると、なかなかに恥ずかしくて……ひとこと言っていると、死にそうです」

あすみ

「え？　なんでやってみようと思ったのかって？　あのですね……折角だから、バーチャルっぽい事をしてみたいと思っっているいろいろ考えていたらですね、他のVtuberさんがこういう企画をやっている、すごくいいなあと思って……！」

あすみ

「そうですね……私も、恥ずかしがってばかりじゃなくて、一歩前に踏み出してみようと思います……！　でも、途中で素に戻ってしまうかも知れないので、それはごめんなさい」

あすみ

「あ、とりあえずは、難しそうだったら素でもいいから一通り演じてみる感じですか……わかりました……！　挑戦してみます……！」

あすみ

「で、では、気を取り直して、行きます……！」

あすみ

「それでは、早速どこかにお出かけしてみましよう！　みんなはどこに行きたいのー？」

あすみ

「あ、自動運転じゃないよ？　でも将来的には、私に運転任せろー！　みたいな、自動運転の雪景シキが登場したら嬉しいかも？　乗ってもらえるかな？」

あすみ

「親分主催のヒゲ親父ケツスライダー大会でゴール出来なかった私に、運転任せて大丈夫かな？ 崖からはみ出さないといいね！」

あすみ

「ではでは、改めて、行きたいところを、教えて下さい！」

あすみ

「本屋？ 本屋かあ……どんな本を探して……」

あすみ

「あっ……！」

あすみ

「せ、先輩……？ もしかして、人類の叡智を……？」

あすみ

「あ、ち、違うならいいんです。勘違いです……」

あすみ

「気を取り直して、最寄りの本屋を目指しましょうー！ とりあえず、前進！」

あすみ

「先輩、少し待ってください……いま、目的地を調べるので……！」

あすみ

「え？ 検索したらだめなんですか？ あのあの、私、道に詳しいわけではないので、調べられないと全然わからないんです……」

あすみ

「か、勘……！ どこに辿り着くかはわかりませんが、先輩がそういうんだったら、やってみます……！」

あすみ

「え、えっと、では、その信号を、左です……！」

あすみ

「次は……あ、雪景シキでやらないとですね……！」

あすみ

「およそ、300メートル先を、右」

あすみ

「ちゃんと言うと、ナビっぽい？ ぽくない？ でも、本物のナビっぽかったら、この企画は、あまり意味ない気がするね！」

あすみ

「やっぱり、会話が出来るナビが、未来って感じ？ だよな、だよな。私もワクワクしちゃう！ いかか本当に実現したらいいよね！ というわけで、そのたこ焼き屋さんを左です！」

あすみ

「その細い道を抜けて、次は、右！」

あすみ

「この道をぐーんとまっすぐ行ってえ……！」

あすみ

「あ、そのコンビニで肉まん……！」

あすみ

「嘘です」

あすみ

「間違えました……！」

あすみ

「そ、その餃子屋さんあたりの信号を右です……！」

あすみ

「次の交差点も右です」

あすみ

「その次も右です……!」

あすみ

「あ、あれ、さっきのコンビニが正面に……?」

あすみ

「あの、だ、ダンジョンとかですね、道に迷ったら、右の壁沿いに進むといいつて書いてあって……! 決して肉まんが食べたかったわけでは……!」

あすみ

「そ、そうですね……それならまず、さっき目の前の道を直進していた時に今いるところに右折して入って来ていないとダメですね……!」

あすみ

「せ、先輩……最後の手段が使えなくなってしまいました……本当に勘で行くしかありません……!」

あすみ

「か、勘で頑張ってみます……! では……さっそくここを左折です!」

あすみ

「仕切り直しの気持ちで、がんばります……!」

あすみ

「あ、先輩、そこ、あのアフロを左です」

あすみ

「え!?! えと、あの、あそこに立ってるもふもふの……かなりのアフロを左折です!」

あすみ

「ご、ごめんなさいいいいい、次からは動かないものを目印にします……ね?」

あすみ

「でも、なんだか、こうして先輩とドライブをしていると不思議な気持ちになっちゃいます」

あすみ

「いつもは助手席に乗せてもらっているのに、今日は遠くからカメラで参戦です！」

あすみ

「あ、そこ右でお願いします」

あすみ

「いつもよりも高い位置から正面が見えて、ちょっと楽しいです」

あすみ

「これを見ていて思ったんですが、先輩が頭にカメラをつけてくれたら、私も先輩のしている景色を見ながら、お散歩できますね！」

あすみ

「え！ 私の頭に、先輩の身長の高さに調節したカメラを乗せる？ だ、だめです！ は、恥ずかしすぎてむりです！ リアクション芸人さんもそんなカメラの付け方してないです！ むりむりむりむりむりです！」

あすみ

「ご、ごめんなさい、折角の先輩の提案を断ってしまつて……これでは先輩のペット失格ですね……」

あすみ

「あ、そこは左です」

あすみ

「これからは先輩をカメラ越しに眺めるだけで我慢します……ドローンで常に先輩を追跡します……あ、でもそれならバックの誘導もできますね……？ バックどころか、地図でも音声でもない、ナビゲーシヨンが実現できる気がしてきました」

あすみ

「えっとですね、あのですね……「あのドローンを追ってください！！」ってやるんです」

あすみ

「ごめんなさい……設定がいつの間にか、先輩の運転から、タクシーに切り替わってました……でも、あの、一生で一回くらい、やってみたくないですか？ 「前の車を追ってください！」というやりとりを……」

あすみ

「先輩は優しいです……こんな私を、バカにしないでいてくれるなんて……」

あすみ

「あ、でも、こんど、雪景シキのボイスとして、配布してみようと思います。「前のなんとかを追ってください！」。なんとか、の部分は募集してみます……！」

あすみ

「あ、折角なので、「なんとかを左折」みたいなのも、同じようにやってみようかな……」

あすみ

「使う場面が全く思い浮かばないですけど……」

あすみ

「ごめんなさい……先輩が見ている景色を私も見た
いっていう話から、ハミダシ過ぎてしまいました
……」

あすみ

「で、でも頭の上にカメラを付ける場合は、せめて
麒麟の被りものをさせてください……!」

あすみ

「そうすれば、少しは大丈夫なはず……です!」

あすみ

「馬はだめです……! ライオンはもっとだめです
……!」

あすみ

「えっと……ここは右でお願いします!」

あすみ

「え? 最初の場所に戻ってきてる? ふふ、実
は、そうなんです。先輩に早く会いたくなっ
ちゃったので、先輩をうちまでナビゲートさせて
もらいました!」

あすみ

「えへへ、どうやら私が先輩をナビすると、私のと
ころに案内しちゃうみたいですね。やっぱり、先
輩とは直接お話するのが一番です」

あすみ

「せんぱい、お帰りなさい。家の中で、待ってます
ね」

09. 番外編2 雪景シキの動画収録風景「食リポ」

あすみ

「はい、こんにちはー！ みんな、なんしょーと？
ちゃんと放送、聞いとー？ 雪景シキでー
す！」

あすみ

「今日は、新しい企画第一弾！ ということで、ま
ずは、説明からー！」

あすみ

「その名も、日本全国肉まん食べ歩き！ 地方に
よってコンビニの肉まんの味は違うのか！？ そ
れを、自分の舌で確かめようっていう企画！」

あすみ

「というわけで、今回は、以前少し話に出た、酢醬
油を確かめに、九州の、なんていったかな……羅
刹の国？ その土地の中でも、真の羅刹の国で
はないかと言われている場所に、行ってきた
よ！」

あすみ

「せ、先輩……？ あの、新企画の度に言っている
気もするんですけど……これ、本当にやるんです
か？」

あすみ

「え、えっと、肉まんのレビューは、まだ、何とか
なる気はするんですけど、その土地の、方言を披
露するっていうのは、とっっても難しいような
気がします……」

あすみ

「は、はい……いつものように、これも私が言い出
したことなんですけど、方言って、意外と、真似
できないものだと実感してますね……？」

あすみ

「拙い方言でもいいんですか……？ それなら、とりあえず、折角なので今回の分は、撮ってみようかと思います」

あすみ

「そうですね。まずは、練習です……！」

あすみ

「気を取り直して……」

あすみ

「肉まんのレビューだけじゃなく、学んできた方言に、挑戦してみます！ 羅刹の国なんて言われているのに、方言は可愛いってよく言われるよね！ でも、同じ県なのに、真の羅刹の国は、実はちよっと違ったり？」

あすみ

「ちよっとパンクな感じのモンスターレーナーの子が、緩い羅刹の国の方言を使うけど、それが近いかも！ あとは「ダーリン」と「だっちゃ」で有名なあの子の喋り方が、少し近い！ って教わったけど、誰？ みんなは知ってる？」

あすみ

「じゃあまずは、怖いとも言われがちな方言だから、怖いのを一番に持ってきます！ でも、意外と可愛いかも？」

あすみ

「」

あすみ

「なんか。なん見よんかちや。くらすよ！」

あすみ

「えっと、「何を見てるんだ、ぶっ飛ばすぞ」という意味らしいね」

あすみ 「え、私が言うのとあまり怖くない？ それはそれで、いいかも？」

あすみ 「ちなみに、「っちゃ」というのは、どちらかというと否定的なニュアンスを含むらしいよ」

あすみ 「知らんっちゃ、うっせーっちゃ、みたいなの？」

あすみ 「先輩……？ あの、どんなシーンを演じるかは、もう少し考えた方がいいような気がしました……何か、良いアイディアはないでしょうか……」

あすみ 「え？ 私たちの、思い出の出来事、ですか……そう、ですね、それだと、イメージもしやすいですし、気持ちも、入りやすいかもです。聞こえ方が変わって、新鮮かもしれません……！」

あすみ 「でも、これは、練習だけ、ですね。私たちの思い出は、私と、先輩だけのものです。先輩だけに、改めて、言葉を送ります。本番は、別の台詞を用意します」

あすみ 「えへへ、そう考えると、ちょっと恥ずかしいですね。一字一句記憶しているわけではないので、間違いも出てきそうです……」

あすみ 「え？ 先輩がメモしてる？」

あすみ 「先輩……」

あすみ

「先輩、すごいです……！ 流石です！ 私と先輩の思い出を、しっかりと保存していてくれたんですね！ カッコよすぎます……」

あすみ

「先輩のメモを見ながら、方言に挑戦してみますね……？ あ、そうですね。敬語だと方言じゃなくなってしまうので、ここだけは、タメ口で、いかせてもらいます……！」

あすみ

「ちょっと、台本を作ってみます……」

あすみ

「できました……！ では、まずは、出会ったばかりの時の言葉から……肉まん、半分こした時ですね」

あすみ

「私がこんな食べたかったやけん、くれた人も同じくらい食べたかったんやろーなっち……やけ、少し冷めとるんやけど、中はまだ温かいっち思うけん。嫌やなかったら、半分こ、せん……？」

あすみ

「は、はずかしいいいいい……」

あすみ

「ど、どうでした……？ あ、ダメです、やっぱり聞かないことにします……！ 怖いので……」

あすみ

「で、では、次……！ シンポジウムの、あとですね……！」

あすみ

「それ、私を庇ったくれたけん……喋れんくなった私に代わって進行してくれたけん……！ 私、あんとき泣きそうやったんよ……すぐ代わっちくれた先輩が、そーとー頼もしくて……しょーじき、かつこよかったけん」

あすみ

「は、はい！ 次、いきます、次……！ 次は……アメリ先輩と先輩が、抱き合っていた……かのように見えたあとのことですね……！」

あすみ

「わ、わたし、そういうのは嫌やけん……先輩、すごい雰囲気いい人なんに……男の人は苦手やけど、この人なら話せるかもしれんっち、そう思ってたけど……学校でとか、人前でとか、いかんやんっ！ そんなん、好かん！」

あすみ

「あ、なんだか、こっちのほうが距離感が近い？ ような？ きのせい？ あ、次、いきます……！ 次は、温泉の時です……！ 温泉……また、行きたいですね」

あすみ

「ご、ごめん……痛かったやろ……？ 私、なんしよっとんやろ……せっかく先輩の疲れ癒そうっち思っとったんに、逆に痛い思いさせとるやん……ごめん……わざとじゃないんよ、本当にごめん……せんぱい……あんね、恥ずかしいんやけど、私、あの……こういうの、初めてやけん……」

あすみ

「これは、だめです。だめなやつです……勝手に勘違いして、盛り上がったってしまったやつです……！次に行きます……！これは、お付き合ひ、し始めたときですね……！」

あすみ

「私……先輩に出会った時、Vtuberやとそれなりに自信をもっとったんよ……でも、笑われたときのこと、頭から離れなくて……本当の自分は全然自信なかったけん……先輩に生徒会に誘われて……いっしょに生徒会やって……初めて自分が必要とされとるんやって思った」

あすみ

「先輩が生徒会の仕事やらせてくれたん、嬉しかったんよ。頼ってくれたん、すごい嬉しかったけん。先輩は私の素性を知らん時から、雪景シキの歌声褒めてくれたけん、先輩は本当に私のことみとめてくれとるんやって思った」

あすみ

「そう思ったらもう、気持ち止まらんくなった。助けてっち言ったら、直ぐ来てくれたん、本当に嬉しかったけん。先輩の声を聞くだけで、心が落ち着くんよ、先輩と一緒にいるだけで、元気になるんよ。先輩のこと考えるだけで、ドキドキが止まらんくなる……私、先輩のこと、好きやけん」

あすみ

「こ、これも！だめなやつです！メモのこの部分は、捨ててしましましょう！これは黒歴史です！繰り返してはならない、人類の戦いの歴史です……！」

あすみ

「あ、次は、なかなかクライマックスなやつですね……！」

あすみ

「私、歌うの好きなんよ。でも、歌うんが怖いっち、恥ずかしいっち、思っとった時期があった。それでもどーしても我慢できなくて、この電子の世界で、歌ってみたんよ。リアルの世界からハミダシて、それで辿り着いたVの世界は、私においていいっち言ってくれた」

あすみ

「したら、上手いっち言ってくれる人がおった。綺麗な声やって言ってくれる人がおった。もっと聞きたいっち、言ってくれる人がおった……！ちよっとずつ、ちよっとずつやけど、聞いてくれる人が増えて、今ではこんなたくさんの人の前で、歌えるようになった」

あすみ

「応援してくれるみんながおったけん、私はここまであつた！ みんなが私をここまで連れて来てくれたんよ！ この電子の世界は仮想現実っちなわけとーけど、私はそうは思わん。ここは、もう一つの現実やけん」

あすみ

「私はこの世界で認められて、自信つけて、前に進んだんよ。目の前の世界が怖いっちは、もう一つの世界で頑張ったらいやん。どんな世界やつても、認められたら自信がつくけん。」

あすみ

「自分が活躍できる場所で、自分を見つけていくことができたなら、それが一番いいやん」

あすみ

「でも、辛くて立ち止まるとか、迷ってしまおうとか、あるやん。そんなとき、私の歌が励みになったり、道を示すことができんかって、そんなん思っ歌つとる！今日はそんな私の歌を聞いてくれて、この場所に連れて来てくれて、本当にありがとう！よかったら、また会いに来てくれんやろか！」

あすみ

「懐かしいですね……こんな大舞台、なかなかないですよ……これで、それなりに大きな出来事は終わりのような気がしますけど……今度は、あの時みたいな騒動じゃなく、普通に、大舞台に立ちたいです」

あすみ

「だいたい、こんなところ……かな？では、しめます！」

あすみ

「では最後に！羅刹の国のイメージと現実について、ちょっとだけ触れておきます！」

あすみ

「手榴弾なんて落ちてないし、住民もロケットランチャー担いでたりしない！最近発砲音も聞こえないらしいし、町を歩くとちょっと視線を感じるけど、大丈夫！ご飯はとっても美味しいし、程よく都会！物価も安い！住みやすそうだったよ！」

あすみ

「え、この企画？ とっても辛いから、今回で終わ
り！ また何か別の企画を考えます！ みんなが
大丈夫でも、私の心がだいじよばんけん！」

あすみ

「はい……これで、予定していた分は一通り終わっ
たんですが……これは、継続して行うにはちよっ
ときつそうですね……」

あすみ

「ごめんなさい先輩。練習に付き合ってもらったの
に、なんとも言えない感じになってしまっ……
…」

あすみ

「え？ 次は外国語に挑戦？ そ、それは無理で
す！ むりむりです！」

あすみ

「あ、ありがとうございます。先輩、優しいです。
直ぐ許してくれます……」

あすみ

「また、何か思い付いたら、練習、お願いさせても
らいますね？」

あすみ

「私、先輩のこと、頼りにしとるけん」
